

西国街道変遷図

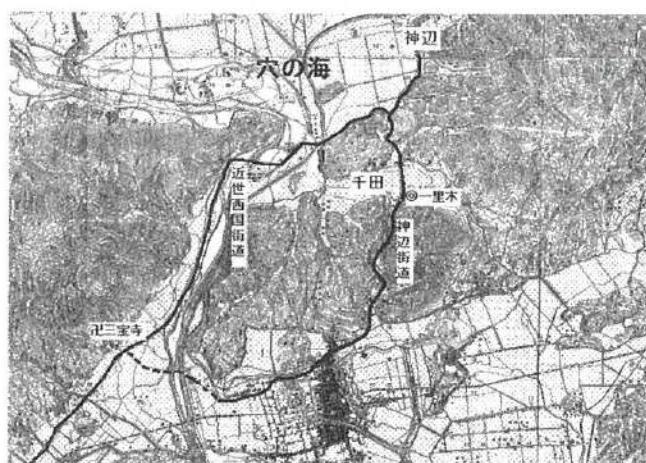
西国街道は、一般的に「旧山陽道」と呼ばれるように、古代の山陽道を踏襲した道であったが、各所で古代のルートからはずれ沿岸部を通るようになつたことから、江戸時代の呼称のように西国街道、あるいは西国往還と呼ぶのが正しい。特に、備後南部ではルートの変更が著しく、古代山陽道のルートは近世に「石州街道」として一部使われた外は使われなくなり、備後国分寺の前から南に折れ、神辺宿



西国街道変遷図

はじめに
江戸時代から明治時代、山陽鉄道が開通するまで、陸上交通の要は「西国街道（または中国道）」とよばれた幹線道路であったことは間違いないが、この街道がいつ頃から、今日のルートになつたのかは諸説あって定かではない。

これは、鎌倉時代以来、内海水運が港町として繁榮し、陸路もそれに伴つて尾道を経由する現在のルートになつたものである。このルートの変更を神辺城の築城を契機とする説もあつたが、神辺城が備後南部の中でもあったが、神辺城が築城されたことは間違いない。



備陽史探訪

第239号

発行

備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-7
TEL.070-1074-9617

備後を中心とした
地域の歴史を研究し、
愛郷の精神を涵養する。

(会則第1章第2条より)

備陽史探訪の会の目的

『大和田重清日記』に見える「セナ田」について

会長 田口義之

を経由するルートとなつた。

これは、鎌倉時代以来、内海水運が港町として繁榮し、陸路もそれに伴つて尾道を経由する現在のルートになつたものである。このルートの変更を神辺城の築城を契機とする説もあつたが、神辺城が築城されたことは間違いない。

えられ、ルートの変更が先で、城の築城が後とするのが正しい。では、このルートの変更が何時行われたのかが問題となるが、南北朝時代今川了俊の「道ゆきぶり」に矢掛から尾道を行つた様子が描かれていることから、この頃には沿岸部を通るルートになつていたと考えられる。しかし、その具体的なルートについては明らかではない。

特に、中世末まで神辺平野の南部に「穴の海」が存在したとすると（1）、現在の神辺平野の南縁を通つて芦田川を渡り、郷分・山手・赤坂を通るルートは洪水などによつて度々交通困難に見舞われたと考えられ、ルートとして固定されていったとは考えがたい。それよりも地形的に、後に「神辺街道」と呼ばれた神辺から千田に入り、千田大峠を越えて吉津に出て、そこから本庄で芦田川を渡り、山手から赤坂・今津のルートを通つたとする方が合理的である。

16世紀後半になると、西国街道を通つた旅行者や大名の記録が増

現在の会員数 226名

会員数は12月上旬現在の数字です。増減があるかもしれません。(いっちゃん)



事務局日誌

尼子氏・塩冶氏の父子ゲンカ

17

田口義之の備後の古墳30選(4)
.....(川内和夫)

15

毛利元就と出雲の

福山医療センターの沿革

14 12

ワシショットレポート

11 9

研究レポート

3

火縄銃の威力を考える!!

1

距離と弾丸の威力との関係

3

中世石造物の調査報告...(篠原芳秀)

1

「大和田重清日記」に見える「セナ田」について
.....(会長 田口義之)

1

双子山古墳.....(種本実)

1

「大和田重清日記」に見える
「セナ田」について
.....(会長 田口義之)

1